

二〇一四年一〇月二八日（京都大原自由吟行句会参加者一七名）

賀茂川の堰煌めける水の秋	宏	虎
大原や秋さぶ庭を去りがたく	"	"
爽やかや水琴窟に耳至福	"	"
露けしやわらべ地蔵は苔まみれ	"	"
秋霖に濡るる参道石畳	わかば	"
溪声に沿ふ参道の散紅葉	"	"
大原の里を訪ねて秋惜しむ	"	"
秋時雨苔庭いよよ艶めきぬ	"	"
落葉径呂川の楽に歩を合はし	菜	々
参道は土産屋銀座もみぢ寺	"	"
大原女の小径を辿り秋惜しむ	"	"
瀬の楽に沿ひたる径に秋惜しむ	こすもす	"
灯火親し眼鏡たびたびすり落ちて	"	"
漣のごとくに揺るる芒原	"	"
秋草の供えられたる石舞台	明日香	"
二上の天辺隠し秋時雨	"	"
庭園の一隅石踏の花明かり	満	天
御陵へ仰ぐ嶮磴天高し	"	"

溪流へ標立つ道草紅葉	せいじ
墳丘のなぞへをおほふ草紅葉	"
秋惜しむ苔の寺苑をたもとほり	つくし
御陵へと仰ぐ乱磴天高し	"
大原の秋を聞かむとバスの旅	ひかり
蹲踞に溢るる山の秋の水	"
立ち仰ぐ千年杉の天高し	ぼんこ
振舞ひの地酒に酔ひぬ村祭	うつぎ
婦人部の店繁盛す村祭	有香
神の杜秋天を突く杉木立	ともえ
廃屋の破れ網戸に秋日濃し	よう子
大釜に湯立てて禊里祭	よし子
力石凍つ恐竜の卵めき	小袖

吟行句会みのる選

二〇一四年一〇月二八日（京都大原自由吟行句会参加者一七名）